

1 地域課題解決のための検討（第 1 回要約）

地域課題

担い手が不足している。

現状

生活支援サポーター

- ・受講者の確保が難しくなっているため、講座修了者が実際に活動できるような工夫が必要である。
- ・協議体でゴミ出しのニーズを把握したこと、生活支援コーディネーターからの声掛けがあったことをきっかけとして、生活支援サポーター養成講座修了者が訪問型サービス B としてゴミ出し支援を行っている。新しい担い手が集まりにくいことを課題として感じている。以前と比べて中高齢になっても働いている人が多く、勤めに差し障ると断られる。

運転ボランティア

- ・希望者は包括を經由してマッチングしている。
- ・養成講座の受講者確保が難しい（自家用車を使用するため事故の心配も一因か）。
※令和 7 年度運転ボランティア養成講座受講者 4 名
- ・男女比では女性のボランティアが多い。年齢要件が 70 歳未満であるが 70 歳未満では仕事をしている人が多いと感じる。
- ・登録者は多いが実働はその半数となっている。
- ・制度を知らない介護支援専門員もいる。
- ・訪問型サービス D で行っているが、団体によっては事業対象者や要支援以外の希望者にもボランティアで行っている実績がある。

愛西市ボランティアセンター登録の個人・団体ボランティア

- ・ホームページ等で広報しているが十分周知されているとはいえない。
- ・昨年度養成講座を行ったが広報を見て参加した人は 1 名にとどまり、それ以外の参加者は直接声掛けをした。
- ・今年度はボランティアセンターの登録シートを作成し、ボランティアセンターを紹介するチラシを公共施設等に設置する予定である。

老人クラブ

- ・県指定の事業として、生活支援では電球の交換や買い物支援、ゴミ出しを行っており、友愛活動として独居老人の訪問や施設でのカレー作りも行っている。
- ・奉仕活動として神社や公園の清掃、また文化学習活動として、しめ縄作りを行った。
- ・登録者数の減少や解散するクラブがあるなどが課題である。
- ・声をかけて入らないと言ってもタイミングによっては、別の機会に声を掛けたらやろう

かなと思う人もいるかもしれない。声掛けを行うことがよいと思う。

見守り訪問／総合事業

- ・介護支援専門員の中には事業の存在を知らない人もいる。介護支援専門員が独居の事業対象者や要支援の人を担当する中で、他者との関りが少ないが訪問介護による生活支援は必要ない人に対しては、訪問型サービスではなく、見守り訪問をマッチングさせるとよいと感じた。

※上記のことから、周知が課題であり、また具体的な成功事例を知りたい。

シルバー人材センター

- ・会員数のほとんどの人が実際に活動している。
- ・依頼のほとんどが草木の剪定や除草であり、福祉家事援助サービスの依頼は年に2、3件と少ないため周知方法の工夫が課題である。
- ・介護支援専門員が把握するニーズとつながっていないので、介護支援専門員からシルバー人材センターに依頼するルートがあるとよい。それができれば互助を強化でき、結果として共助も強化できる。

ご近所付き合い

- ・ご近所付き合いが少ない、あるいはない地域がある。
- ・協議体が地区のサロンや老人クラブに声をかけて住民同士が交流できるイベントを開催するなど、近所付き合いを作り出す役割をしているケースもある。

現状を受けての意見

- ・ライフスタイルに合わせて、空き時間を利用して参加できるとよい。
- ・軽度認定者において訪問介護の生活支援の内容は掃除と買い物が多く、生活支援サポーターが行っている内容と重複している。担い手が増え、互助が強化されれば、共助である訪問介護事業所が中重度認定者の依頼にもっと対応していけるので担い手が増えるとよい。
- ・養成講座に参加すること自体、ハードルが高いと感じる人がいると思う。ゴミ出しなど簡単なことから始めてもらい、次はこういうことも、と広げていけたらよい。
- ・漠然とボランティア募集と聞いても何をするのかわからないと感じる人もいる。若い世代も含めてボランティアを知ってもらうことが大切である。社会福祉協議会ではあいさいさん祭りでクイズ等の企画を行ったり、高校生を対象に福祉フェスティバルでボランティアを募り、事後にアンケートを行ったりしている。
- ・前回の地域福祉計画策定のアンケートでは学生や専業主婦や高齢者が地域活動に興味を持っているという結果であった。それらの人たちに働きかけができればよい。